

4. 職員研修

(1) 平成20年度公立大学協会図書館協議会研修会 (広島市立大学)

- ① 主催 公立大学協会図書館協議会
- ② 協賛 広島県大学図書館協議会
- ③ 担当 広島市立大学 (中国四国地区)
- ④ 趣旨 大学図書館の当面する諸問題について研修を行い、図書館職員の知識・能力の向上を図る。
- ⑤ 日時 平成20年9月4日 (木) 及び5日 (金)
- ⑥ 会場 広島市立大学 講堂小ホール
- ⑦ テーマ 大学図書館の魅力アップ術 -学生の利用率向上を目指して-
- ⑧ 参加 33大学 44名
- ⑨ 日程

- 第1日 基調講演 「今大学図書館に求められているもの」
筑波大学大学院図書館情報メディア研究科教授 逸村 裕氏
- 事例報告1 「学生利用をのばす図書館の試み」
国際基督教大学図書館長代行 畠山 珠美氏
- 第2日 事例報告2 「学生の社会的成長を支援する滞在型図書館を目指して
-マイライフ・マイライブラリー-」
東京女子大学教育研究支援部図書館課長 橋本 春美氏
- 事例報告3 「効果的な広報活動の試み -広報ツールの改善を通して-」
三重大学附属図書館情報リテラシー担当 柴田 佳寿江氏

⑩ 報告 研修会の内容をとりまとめ、公立大学協会図書館協議会ホームページに掲載

⑪ 研修会決算報告

収入	研修会予算	310,000円
	参加費	5,000円
	銀行利息	48円
	合計	315,048円

支出	講師謝礼	94,010円
	講師交通費	120,515円
	情報交換会参加費	16,000円
	講師昼食代	2,000円
	お茶代等	13,165円
	報告書作成費	15,750円
	消耗品費等	6,459円
	手数料等	2,350円
	合計	270,249円

残高 (返金額) 44,799円

(2) 大学図書館職員長期研修

- ① 主催 国立大学法人筑波大学
- ② 日時 平成20年7月7日(月)～7月18日(金)
- ③ 会場 筑波大学春日地区情報メディアユニオン2階ホール及
- ④ 受講者 国立ならびに大学共同利用機関法人国立大学30名、公立大学1名、私立大学
4名 計35名
- ⑤ 研修報告

平成20年度 大学図書館職員長期研修参加報告

大阪市立大学学術情報総合センター 片山理子

公立大学協会図書館協議会のご配慮により、今夏、標記の研修に参加する機会を得た。改めて御礼申し上げたい。2週間も職場を離れることには不安もあったが、今となっては参加できて本当によかったと思う。

内容は、A 図書館マネジメント総論として8科目・10コマ、B 学術情報流通等各論として13科目・13コマ、C 演習・班別討議として12コマ、D 見学1コマであり、最終日を除いて、午前2コマ、午後2コマ、1コマあたり90分をみっちり受講した。詳しくは、当該ホームページⁱに、講義要綱と当日配付資料が全て公開されているので、そちらをご覧ください。本稿では、日程を追って、印象に残った講義やエピソードを紹介させていただきたい。

<出発前>

5月下旬、受講決定の通知を受けた。宿泊は、筑波大学が用意してくださるホテルグランド東雲に決め、週末はいったん大阪へ帰ることにした。受講前の提出物は、問題発見・課題解決演習に用いる「私の困りごと」を箇条書きにしたものと、自らのプロフィールであった。

<筑波にて・第1週>

初日は、午前中にオリエンテーション、開講式があった。事前に提出したプロフィールは冊子になって配られ、仲間を知り、親交を深めるのに大いに役立っている。午後からさっそく講義が始まった。そのうち、筑波大学副学長の吉武氏による「大学経営の課題」では、この変革期に求められているのは、ジェネラリストであれスペシャリストであれ、プロフェッショナルな人材だと述べられた。晩の懇親会は、生協の食堂で行われ、研修関係者と受講生のほか、吉武氏も参加して盛り上がった。

続く2日間は、問題発見・課題演習を終日行った。5名ずつ7班に分かれ、事前に提出したそれぞれの困りごとから、問題を選び、それを解消するには何が課題で、具体的に何をすればいいのか、知恵を絞りあった。技法としては、カードBS法、KJ法、マインドマップ法などである。わが3班は、物であれ時間であれ、コスト意識の欠如を克服しよう、というテーマでまとめを行った。

4日目の講義に、東京大学の星野氏による「国立大学図書館の経営」2コマがあった。その中で特に触発されたのは、単に図書館職員(司書)だから専門職なのではなく、図書館という組織のことを考えて経営、マネジメントできる人が専門職なのだ、という考え方である。また、文教大学の鈴木

氏による「私立大学図書館の経営」では、業務委託に関して参考にするべき視点が多く含まれていた。

5日目の最後に、班別討議があった。先の演習とは、メンバーを組み替え、私は国立大学でない、すなわち、公立・私立の5名が集まる第7班に属した。大学の規模がさまざま、共通の課題が見つげにくい面もあったが、国立とは違う、という連帯感のようなものがあり、かつ、にぎやかな面々がそろった。議論が延々続いて収束させるのに苦労しても、沈黙したまま時間が経つ、などということとは無縁の班だった。班別討議は翌週にわたって計4コマあり、最後に発表することになっていた。

<筑波にて・第2週>

第2週は、座席が変わり、新たな気分スタートした。講義内容としては、第1週の総論に対して各論が多く、機関リポジトリについて言及する講師が複数いた。そのほか、学術情報コミュニケーション、利用者（研究者）の行動、電子図書館のマネジメント、著作権、情報リテラシー教育などにおける、最新の話題が紹介された。これらに加え、古典資料、公共図書館の戦略、Googleの検索などのユニークなテーマも含め、実に盛り沢山であった。

講義内容を個人がすべて習得し、アップデートし続けるのは、かなり困難であろう。濃密なカリキュラムにより、職務が高度化しているのを、改めて実感した。学んだことを生かす方法として、今後、職場で、これらの知識を必要とする担当者のために、最先端の動きがどういう組織から出てくるか、どういう情報源があるか、といったアドバイスができればいいと考えている。

さて、和気あいあいの7班も、木曜日の最終コマ、班別討議の成果を発表することになった。近頃の学生が、大学生らしい学び方を知らず、図書館が有効活用されていないのではないかと、という問題意識のもと、新入生に図書館が有益であることを印象付けるための方策を提案することにした。具体的には、入学前、合格通知の段階でのPR、次に、入学直後の適切なオリエンテーション、さらには、利用しやすい図書館の雰囲気作り、である。論理的にはやや飛躍もあったかもしれないが、キャッチコピーとイラストでは、他の班に負けない？企画書になった。

最終日は、ストレスマネジメントの講義に続いて、筑波大学中央図書館を見学させていただいた。耐震補強のための工事中で、資料を移し、書架を取り除き、床がむき出しの部屋もあった。入館してすぐの所に、スターボックスが店舗を構えているのが、やはり印象に残った。

午前中ですべての課程を終了し、無事、修了証書をいただいた。名残惜しい仲間たちと、駅近くで昼食をともにしていると、落雷でしばらく停電するなど、最後まで思い出深い研修になった。

<後日譚>

心強い仲間が立ち上げてくれたメーリングリストのおかげで、教えたり教えられたりの情報交換がその後も活発に行われている。9月初旬締め切りのレポート提出の際には、それぞれの状況が時々刻々伝えられたりもした。最近、仕事に関して実際に相談することがあったが、何名かの方から、すぐに返信があり、判断のための参考になった。

かりに受講しなくても、講義の内容は、ほとんどホームページで確認できるわけだが、各地の精鋭たちと直接顔見知りになり、その後も役に立つネットワーク作りができることこそ、この研修の最大の魅力ではないかと思う。今後も、公立大学からこの研修に参加される方が続くことを願う。